夏の靈感

小川久雄

高野山にて

たそがるる水無月ぞらの雲あかり山の青葉に映ねてさびしも
うちなびくたそがれ雲の仄あかり道の佛の面にあふるる
杉若葉下てる路の夕かげに石のほとけはさびしげに立つ
たそがれの雲うつくしと見とれゐる心やすらにくつろぎにけり
草の穂にのこる陽もなく暮れしづむこの山はらに鐘なり渡る
向つ嶺に立ちのみぢかき杉林あさぎりこめてかくろひにけり
うつすらと草の穂を染め明けにける空に光れる星のありけり
朝雲は朱をふくみてわが山の空をゆるかに流れゆくなり
つつましく草々の葉のゆらぐ見ゆ朝の心に悔ひつつ居れば
山も暮れ空も暮れぬれど木蔭なる佛の肌ねほのかなるかも
草そよぐ夕細道をあよみつゝわが現し身を愛しとおもへり

夕あかり仄にただよふ窓さきの庭の砂ごはさびしく匂ふ
法師せみ春戸べに來鳴く夕近みそぞろに妻を欲しと思へり
死人燒く煙ほろ〳〵山腹ゆ立ちのぼる見ゆ空暮れにつゝ
おのづから日の暮れ沈み向ふ山の死人燒く火はほろ〳〵と燃ゆ
谿底のなかばは氷にひたりたる岩に陽のてり明るきま晝
鶺鴒さびたる岩の影にゐて尾をふれる見ゆ谿まあかるく
細り月冴ねしづまりてしとりたる櫻の若葉ゆらめきて見ゆ
見はるかす熊野の山のかたぞらに白き雲湧き夏らしきかも

法隆寺にて

じみ〳〵と心なごみてみ佛のひそまりませるみ堂めぐるも
靜けさに集ひの中にわれありて心ひそまりうつしけなくに
さまざまのみ佛たちの並みませるみ堂ほのかに晝明りせり
痛ましく色あせまさるみ佛のやさしき瞳の光ひそけし
天地をゆびさしませるみ佛の細れるすがた見ればよろしも
金堂にしましひそまりいわけなく心はなごみ經となへけり
そのかみの人のいのちはかがやきて凝りのこりけんこれのみ堂に
かまだらにはげし壁畫にたまきはるいのちこもらひ光れるかこれ

――大正八年の作――